



1867年、和歌山県出身の博物学者・生物学者・民俗学者。中でも粘菌研究と民間信仰には特に力を注ぎ、圧倒的な博識と独自の視点で日本文化と自然科学を融合させた。

文通を通じて知り合ったアメリカ人の研究仲間を訪ね東海岸に行き、食料品店で住み込みの仕事をしなが、菌類の研究を続けた。その間には、キューバ島で採集を行い、新種の菌類も発見している。

当時、最先端の研究が行われていたイギリスに渡ったのは25歳の時だった。現地の日本人を通じ人脈を得て、世界最大規模のコレクションを誇る大英博物館に自由に出入りすることを認められる。膨大な蔵書をも備えた環境で、熊楠は自らの研究に打ちこみ、科学学術雑誌『nature』にも次々と論文を寄稿して高い評価を受けた。「KUMAGUSU」の名は知れ渡り、日本のみならず東洋の文化、歴史、言語にも精通する知識と能力を請われ、翻訳の仕事を手伝い、同館の仕事もサポートした。同時に、世界中から人々が集まる国で、幅広い交友関係も築いた。

とは言え、東洋人が欧米で生活なり研究するにはまだ苦難の多い時代だった。大英博物館で出入り禁止になったことを機に、33歳で帰国する。日本を離れて14年の年月が流れていた。父母は既に他界し、酒造業に鞍替えした家業は弟が継いでいた。

日本でも研究を続け、50歳の時に自宅の庭で発見した新属新種の粘菌には「ミナカテラ・ロンギフィラ」の学名がつけられた。学者として論文や著書を発表しながら、故郷の海に浮かぶ自然豊かな島の保護運動や神社の統合政策への反対運動も行っている。プライベートでは39歳で結婚し、2人の子の父親となった。62歳の時には、昭和天皇に講義するという名誉を賜る。その直後、夫婦で写真館へ出向き撮影された1枚からは夫婦の仲睦まじさが伝わってくるようだ。74年の生涯を閉じる時、その胸にはどんな思いがあったのか、想像せずにはいられない。

(執筆/ライター 篠田 りょうこ)

16歳 中学卒業後、和歌山から上京
19歳 東京大学予備門を中退し、渡米
25歳 渡英し、大英博物館を拠点に研究
33歳 日本へ帰国し、研究を継続

vol. 22

南方 熊楠

▶▶ Minakata Kumagusu

探求心と情熱で世界を翔けた 知の巨人

学問の世界はとかく権威や伝統にしばられがちとも聞か、真の探究心は常に常識を疑い、新たな視点を求めるのではないか。そんな思いを抱かせてくれる人である。

▶▶▶ 幼少期から際立っていた非凡なる才能

博物学者であり、生物学者であり、民俗学者でもあった南方熊楠は、1867年（慶応3年）、現在の和歌山県和歌山市で金物屋を営む家に、6人きょうだいの二男として生まれた。非凡なる才能は、幼い頃より際立っていた。動植物や天文など自然科学から、生活、芸術、社会制度に至るまで図解と漢文で説明した105巻におよぶ大百科事典を、そっくり暗記して書き写したというエピソードを聞けば、いかに類まれなる能力の持ち主だったかわかる。そんな熊楠に中学校時代の教師は、「博物学」という学問があることや、動植物の採集のノウハウ、分類方法などを教えてくれた。

1883年（明治16年）、16歳で中学校を卒業すると、上京して難関の東京大学予備門に入学する。しかし、授業そっちのけで世界の知にアクセスできる国立図書館に通い詰めて本を読みふけり、動植物の採集にいそしんだ。ある日、アメリカの植物学者が6000点の菌類を収集し、標本集を出版したことを知る。「だったら、それ以上に収集してみせる!」。熊楠の眼差しは世界を見据えていた。

▶▶▶ 欧米で学び、評価を受けた後、帰国

東京大学予備門を中退後、何とか父を説得しアメリカへと旅立つ。19歳の時である。西海岸にある商業学校に入学したものの期待したような授業ではなく、次に入った農業学校もわけあって自主退学した。その後、